

---

# スパイダーハンター

夢のツバサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スパイダーハンター

### 【Nコード】

N2142K

### 【作者名】

夢のツバサ

### 【あらすじ】

8000年前の出来事から始まった異界の生物との争いが続いている  
仮想世界。

そこには異界のものとの戦闘を専門に行う組織があった。

そこに所属しているヴィーナスと相棒のナイト、そして仲間達との戦いを描くつ（-w-）

是非見てください

## 序章（前書き）

これは、私の友人に『ちよつとだしてくれないかい？』と  
言われたので、出すことにした小説ですww  
みんな見てくださいっ（・w・）／ ではなく、どろろっ！…！

## 序章

許サナイ 許サナイ 許サナイ

奴らが憎くてたまらない。

許サナイ 許サナイ 許サナイ

この憎しみをどうすれば晴ラセル？

許サナイ 許サナイ 許サナイ

憎イ 憎イ だから奴ラヲ絶対許サナイ…

そこには澄み切った水がたつぷりとたたえられた湖があった。

それは幻想的に、淡く光っていてこの世のものではないような気がした。

そこに一人の人間が現れた。

その人間は、粗末な服で身を包んだ、40半ばの小太りの男で、目は異様なほど大きく

見開かれており、今は荒い呼吸を繰り返していた。

「こ、これでオレの願いが…」

目の前の幻想的な湖に圧倒されながらも、嬉々とした表情をうかべ、男は叫ぶ。

そして、震える手で腰に下げてあった袋から、何かを取り出した。

それは、誰もが見ほれてしまうほど美しい輝きを放つ水晶だった。

不思議なほど、汚れも曇りもないその水晶を男は迷いもなく湖へと投げる。

水晶はキラキラと光りながら、湖に落ちた。

すると、湖の水面が風もないのに揺らぎ始め、怪しい光を放ち始める。

やがて光は意思を持っているかのように、湖の真ん中に集まり何かを描き始める。

それはまるで、人智を超えたものが目覚める前触れのよう。

「さあ、俺の願いを叶えてくれっ!!」

我慢できずに男は叫ぶ。

その時、一際大きな音がしたかと思うと、男の目の前に『それ』は現れた。

そして『それはゆっくりと開き始める。

『ヤット、開イタ…』

時は流れ…

だだだだっ！！ ばんっ！！

「しつちよーーーーーっ！！」

そんな怒鳴り声とともに、一人の少女が騒々しく部屋に駆け込んできた。

少女の名前は、ヴィーナス・ヘレン。短めの金髪に、海のような蒼い瞳が印象的な少女で

黙っていれば大人しめの印象をあたえる可愛らしい少女だが、今はスゴイ形相。

ヴィーナスは駆け込んだ部屋をせわしく見回し、目当ての人物がいないとわかると

そばの机に座っていた女性の事務員につかつかと歩み寄り、バンバン机を叩く。

「ちょっと、室長はどこっ！！はやく呼んでっ！！」

「は…はい、ただいまっ」

事務員はヴィーナスの剣幕におびえきり、急いで机上の電話に手を伸ばした。

その時、

「おーい、何オフィスのねえさん苛めてんだあー？」

と背後で若い男の能天気そうな声がした。

『室長っ！！』

オフィスのおねえさんの安堵の声色とヴィーナスの心底恨めしそうな声色が同時に重なった。

その様子をくすくすと笑いながら、室長と呼ばれた男は歩み寄ってきた。

男の名はレオナルド・ルビウス。20代半ばほどで薄い茶色の髪と瞳。顔立ちは一見クールで、

眼鏡に白衣という科学者のようないでたちだが、性格が軽いためか、普段の仕草も

笑った顔もどこことなくへらっとしている、また、よく白衣の下に興味の悪いティーシャツを

着ているなんだか不思議な人間なのだ。

ヴィーナスはレオナルドの前までつかつか歩み寄ると眼前に手にしていた書類を突き出した。

「室長っ！！なんですかこの任務はっ!？」

「ああ…なんでって、そっちこそなに言ってるのさヴィーナス君？」  
上司に意地悪そうな笑顔で切り返されて、ヴィーナスの抗議の勢いが弱まった。

その隙を突くように、レオナルドは畳み掛ける。

「ヴィーナス、君に出来ない任務なんてあるわけないでしょ？スパイダーゴーストの中で

最も実力のある者達が集まるスパイダーハンター第1班に所属している君に…」

「むっ…」

レオナルドのおちよくる様なセリフにヴィーナスは不服そうに声を漏らした。

任務、スパイダーゴースト、スパイダーハンター…

ヴィーナスのような年代の少女が日常的に使っような言葉ではないはずだ。

しかし、彼女はふつうの少女ではない。とある目的のために、戦士として戦っているのだ。

ではなぜ、彼女のようなものがいるのか？

スパイダーハンターとはいったいなんなのか？

事は8000年前にさかのぼる  
：



## 序章（後書き）

はあい、なんか微妙なカンジで第一話が終わりました。  
え、スパイダーゴーストってなに？　って思われた方、次話に書いてあるんで

次を読んでみてください（ - w - ）　さりげなく宣伝

では、次回も見てくださいw

## 第二話

時は8000年前、当時栄えていた『フィアタ』という国にとある魔術師がいた。

魔術師はある日強力な魔力の結晶を作り出した。そして…

魔術師はその結晶で異世界を作った。その世界には多くの生き物が結晶の力に

よって生きていた。

だが…結晶の強大な力はやがて異世界の生き物達をスパイダーと化し、スパイダーは

人々を襲い始めてしまう。

己の罪の重さを悔いたその魔術師は異世界の扉を湖に沈め、封印した。その際、結晶は

鍵として使われたと伝説では伝えられている。

しかし、数十年前何者かによって封印が解かれてしまい、再びスパイダーが人々を

襲い始めた。それに対抗するため、とある組織が創られた。

それが『スパイダーゴースト』そして、そこは魔力を持った特殊な人間が所属し、

スパイダーから日々、人々を守っているのだ。

そういう人間を『スパイダーハンター』といい、ヴィーナスもその一人なのだ。

「で、いったいこの任務のどこに問題があるわけ？」

「私が嫌なのは、任務そのものじゃなくて…なんで私がまたナイトと組まなきゃ

なんないんですか!？」

言っているうちにだんだん腹が立ってきて、手にしていた書類を握りつぶし、

床に投げ捨てた。

その時…

「おい」

ヴィーナスの背後からなんの感情も込められていないぶっきらぼうな声が聞こえた。

彼女はその声に、びくつ、としてしまった。

そんなヴィーナスの態度とはうって変わって、室長は背後からやってきた少年に

嬉しそうに声を掛けた。

「よう、ナイトッ!!」

「……」

ナイトと呼ばれた少年ナイト・レイラーは漆黒の瞳をじっとヴィーナスのほうに向けた。

表情がない分初対面の人から見たら、『睨んでるのか?』と思われそうなくらいだ。

ヴィーナスは、実力的によく、このナイトとよくペアにされる。

最初は黒髪に前髪辺りは白髪という不思議な色合いと表情の乏しさにたじたじ

していたが、今では慣れたもので、『なんかムカつく奴』というレベルにしか

思っていない。

「ちよつ、ナイト！！ あんた明日まで任務じゃなかったっ！？」

「…終わった」

ヴィーナスの問いにナイトは無表情であっさりと答える。その答えにヴィーナスは

思わずうめき声を上げそうになった。

こいつの任務が長引けばよかったのに…そしたら組まなくてもよかったかもしれないの

に。

「…室長、ペア変えてください」

ヴィーナスが弱々しい声でレオナルドに懇願した。

しかし、

「いやあゝ、そうしてあげたいのは山々なんだけど、今回の任務は難しくてな。強くて

相性のいいペアっていったらお前らしかいなくて…だから、却下ね」

と、笑顔で一蹴された。

ヴィーナスも、そんな簡単にペア変更ができるとは思っていなかった。なのでたいして期待は

していなかったのでもいいのだが、『ナイトと相性が良い』と言われたことに結構な

ダメージを喰らった。

「……」

「そんじゃあ、俺もうすぐ会議だから」

うんざりしたような顔で絶句していたヴィーナスをおいてレオナルドはさつさと

いつてしまった。

「ヴィーナス、この書類をもう読んだか？」

ナイトはいつの間にかヴィーナスが握りつぶした書類を拾っていて、それを差し出し

ながら言った。

「あんたとペアになるってトコしか見てないけど、何かっ!？」

「いや、まだならこんな風にしないでちゃんと最後まで読め」

ヴィーナスはそれをふてくされた顔で受け取るなり、ナイトは去っていった。

「……ふん」

あの万年無表情おとこ…女の子にもうちよつと優しく出来ないんだろうか。

って、ナイトの事ははいつでもよくて!!

ヴィーナスは、よけいな事を頭から追い出すようにぶんぶん頭を振り、書類に目を

落とした。

ヴィーナス&ナイトへ

『今回の任務は、異世界の扉を封印するために無くなった水晶を探し出す事。』

一週間後の明朝には出発せよ。

がんばってねー

室

長。』

「…うげえ、なにこの任務」

というか、書類が相変わらず、緊張感無いんですけど…ほんとにゆるいなあ

などと考えていた時…

「んー…どれどれ」

と、ヴィーナスの頭上で声がしたかと思うと持っていた書類がさつと奪われる。

ヴィーナスが急いで振り返ると、そこには黒いマントをまとったかなり長身の青年が

立っていた。顔は大きめの帽子をかぶっていて口元からでしか表情が読み取れない。

「ひゃあゝ室長…大胆な任務を出すねえ」

青年はそう言った後くすり、と小さく笑った。

## 第二話（後書き）

はあい、スパハ第二話ですっ（・w・）

この物語の原作者（作者の友達）も見に来たらしく

スパハの読者数がコツコツ伸びているのが嬉しいそう  
w  
これから皆様読んでね  
w

では？（>w<）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2142k/>

---

スパイダーハンター

2010年10月28日06時25分発行